
Beast Owner

虹色遊戯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Beast Owner

【Nコード】

N3454F

【作者名】

虹色遊戯

【あらすじ】

獣者とよばれる召喚獣をつれた美女アスカの運命を描いたお話。

プロローグ

「なあ、最近やつ噂を聞かなくなったな」

「やつって？」

「ちよつと前に現れてバトルは連戦連勝だったという戦場の天使の異名をもつ女だよ」

「ああ、そついやきかないな。なんでもすつげー美人らしいじゃん？」

「かなりの美人で獣者も天使みたいらしい」

「一度みてみたいよな。なんで最近話しきかないんだろつな。」

「男でもできたんじゃないか？」

「かもな。あ、最近だと・・・」

カランカラン

話を遮るかのように酒場のドアが動いた。

そこにはマスターがいらつしゃいの声を忘れるほどの美人がいた。髪は栗毛で腰まであろうかというロングヘア。

碧眼の二重で吸い込まれそうになるほど綺麗な瞳をしている。

身長は高くグラマーなボディがコートの上からでもわかるほどだ。

そしてその女性は酒場の男たちの視線を釘付けにしたままカウンタ―席に座つた。

「ねえマスターミルク1つ・・・」

「ホントに酒場でミルク頼むやつがいるんだな。ここは姉ちゃんみたい人がくるところじゃないぜ？」

そついつつとある男が近寄つてきた。おおかたナンパのつもりだろつ。

「勘違いしないで。ミルクはこのこの。私はこの店で一番アルコール度数の高いやつをロツクでお願いね。あと私にはアスカ・ロング

ロードという名前があるの」

「へへ、そいつあすまないね。ところでこのこつてのは何処にいるんだい？」

「ちゃんとここにいるわよ？」

そういつつコートをめくった。そこには直径20センチくらいのゲル状の丸い生物、いわゆるスライムが一匹いた。

「なんだお姉さんもバトラー目指しているのかい？」

「まあね。いずれこのこと全国制覇するのが目標なの」そういつつ出された酒を飲み始める。

「へっ、しかし獣者がスライムじゃ全国制覇する前にし死んじやうんじゃないのか？」

「ミリアルドをそんじよそこらのスライムと一緒にしないでくれる？」

そういつつ男の咽喉元にナイフを突きつける。

あまりにも素早いその動きに誰もがついていけなかった。

「わ、悪かったよ。しかしスライムでなんて。せいぜい種別1位とるのが精一杯だろ？」

「あら？なんなら勝負してみる？」

「へっいいのかよ。俺の獣者はゴーレムだぜ？」

「その代わり私がかつたらここ、貴方の支払いね」

OKと返事をもらい先ほどの酒を飲み干し2人は外に出た。

いつの間にか酒場にいた客は全員が観客と化している。

「ルールはオーソドックスにタッグマッチでどちらかのバトラーがギブアップするか獣者が戦闘不能になったら試合終了というルールでいい？」

「いいぜ」

「じゃ、誰かスタートの合図をお願いね。」

そういつと外野からファイト！と掛け声がかかる。

その合図とともに3メートルはあるつかという巨体が勢い良く飛び出しミリアルドを力いっぱい叩き潰した。

「楽勝だぜ！」男はいきまきながらガッツポーズをとっている。

その瞬間、ゴーレムを包む謎の物質。それは良く見ると先ほどつぶされたと思われたミリアルドだ。「な、なんだ？叩き潰したはずだぞ！そ、それに大きくなっただと！？」

男はうるたえだす。つぶしたはずのスライムが反撃をしてくるなど今までになかったのだろう。

「私のスライム、ミリアルドはレア種でね、体積、密度、元素など自由に換えられるの。」

その台詞とともに男の背後をとりひじ間接を極め男はギブアップを宣言した。

あまりにもあっさり勝負がついた。

観客もあっけに取られたのか異様な静けさだ。

「ねえお兄さん、名前は？」

「俺か？俺はバズーていう・・・」

「そう。じゃ、バズーさん。ご馳走様」

「あ、ああ」

「またね」

そういい残しアスカとミリアルドは去っていった。

「ものすごい美人で強い女性がいたもんだ」

いつのまにかバズーだけでなく酒場にいた男達までもがアスカの魅力にとりこにされていた。

「ま、まさか戦場の天使・・・？」

誰かがそういった。

「ただど戦場の天使はその片腕を犠牲に天使を獣者にしたって。アスカさんには両腕きちつとあつたぜ？」

「でも、どこかで聞いた噂では戦場の天使は腰まであろうかという栗毛の髪と雷神の如き素早さがあるって・・・」

そんな話が終わらないうちにアスカもうどこかへ行ってしまった。

第一步

獣者（じゅうしゃ）とは

命の一部をささげ召喚の儀式を行うことによって生まれる召喚獣である。

命の一部とは腕なり指なり髪などという体の一部をさす。

獣者の強さや体格などはささげた体の部位や機能の重要さに比例する。

ゆえに爪や髪などの再生可能部位だと弱く小さい獣者になり、四肢や耳といった部位を捧げたときは強く大きい獣者が召喚されやすい。獣者は命の一部を捧げた者が深く影響を受けたもの、性格、捧げた部位などによりその姿や形を変える為同じ獣者はいない。

一度ささげた体の一部は2度と召喚獣を生むのにささげることはできない。

しかし指をささげた後に手首より先、またはその逆といったようなささげ方は可能である。

獣者に寿命はないが人間と同じく呼吸し物を食べ生命維持を図る。その生命維持を絶つたり直接的に命にかかわるほどの病気や怪我をすると死に至る。

獣者が死んだときは体の一部に戻り機能等は召喚にささげる前と同じ状態となる。

「ふう、やっぱり小さな町じゃろくな大会がないわね。この前立ち寄った町でも大会はなかったし。やっぱりでかい都市とか町にいかなきゃな。」

そういつつ大会スケジュールなどをチェックしながらホテルを出る準備をする。

アスカが次に行く予定の町はでかい大会はないが月例大会を開いている。

その月例大会に参加をするためアスカは次の町へと歩を進めるのである。

ここで大会について説明しよう。

まず全国大会とは全国4ヶ国の主要都市で行われる大会で各都市年1回行われ、3ヶ月おきに行われる。

全国大会には種族別、体重別、モンスターソロ、バトルロイヤルの4種目がありこれらの大会で優勝すると全国制覇となり莫大な賞金と栄誉が与えられる。

この全国大会への参加方法が先ほど話題に挙がった月例大会が鍵である。

月例大会はいろいろな都市や町で毎月1日に行われており、各会場で審査員に合格をもらいこれが10個以上たまるか5個以上+全国大会参加経験者ないし全国大会関係者の推薦を5つ以上もらうか開催国王の推薦をもらうか、の3つになる。

一度参加資格をもらうと3年間有効となる。

ちなみにこの制度が施行され始め全国制覇をなしたのは現獣者格闘協会会長にしてもとチャンピオンのレニールと現チャンピオンのアイギスという青年の2人だけだ。

どちらも伝説的なチャンピオンで初代と二代チャンピオンがレニールで去年そのレニールを圧倒的な強さで下したのがアイギスだ。

アイギスは今年の全国大会のひとつをすでに優勝している。

と、ここでアスカの話に戻る。

アスカは大会参加経験者や開催国王にコネなどないため王道の道ので全国大会を目指さなきゃならない。

「うーんと、次の町まで歩いて2日くらいかな。月例大会開催日前日くらいになっちゃうな。急がないと。」

文明が現代ほど発達していないこの世界では移動手段は徒歩か馬車

といったところだ。

もっとも移動に優れた獣者を持つものもいる。

例えば大型の鳥や四足歩行の獣など。

しかしミリアルドはスライムなのでそうもいかない。

夜になって少しの時間が経つ。だいぶ歩いたがまだ1/3ほどしか歩いていない。

「もうちょっと歩いたら休憩にしようね、ミリアルド」

そういいながら歩く。もう少しいったところに水場があるからだ。

「うー疲れたー。やっぱりけちらず馬車使えばよかったかな」

そういつつうなだれながら歩いていると後ろから何か近づき配。

「ん？」と振り向いたときに馬車に乗っている人もこちらに気づく。

「こんな時間に女性が一人で歩いていたら危ないですよ。よかったです乗っていきますか？」

20代後半から30代前半くらいの人のよさそうな男性だ。

女の勘だがこの人は安全な人と判断し乗せて貰うことにした。

「へえ、クランの町にいくんですか。奇遇ですね。僕もなんですよ。」

物腰柔らかく予想通りいい人だ。

「僕も急遽仕事で向かうことになったんでこんな時間に馬車を走らせているんですよ」

あたりはもう真つ暗で一般人はもう寝ている時間帯だ。

「あ、申し送れました。僕はアクセル・スマックといいます。」

「私はアスカ・ロングロードよ」

「いやあ、アスカさんみたいな美人としりあえてうれしいな」

こんなことをいうが下心は感じられない。根っからの紳士みたいだ。

「あのアクセルさん。」

「なんですか？」

「申し訳ないんですけど私疲れているので少し横になってもいいですか？」

といつつあくびが出る。アクセルさんが紳士だと判断したから
出た言葉なのか単に眠かったのか、いまじゃ馬車のゆれも心地良
く感じられ簡単に眠りについてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3454f/>

Beast Owner

2010年10月28日01時00分発行